

きく

農薬取締法上の「きく」は、食用以外の農作物を指す。

葉を食用にする場合は、「野菜類」か「葉菜類」か「レタス以外のきく科葉菜類」か「きく(葉)」に適用のある農薬を使用すること。

花を食用にする場合は、「野菜類」か「食用花」か「食用ぎく」に適用のある農薬を使用すること。

—— 発病・加害時期
 == 発病・加害最盛期

作型・病害虫名	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
夏秋小ぎく露地（盆出荷）					▲ 定植				■ 収穫				
秋ぎく無加温半電照								● ▲ さし芽				■	
秋ぎく露地								● ▲			■		
黒さび病										==	==		
黒斑病・褐斑病										==	==		
白さび病										==	==		
根頭がんしゅ病													
立枯病													
アブラムシ類													
ミナミキイロアザミウマ(アザミウマ類)													
ミカンキイロアザミウマ(アザミウマ類)													
オンシツコナジラミ													
ハダニ類													
マメハモグリバエ													
ヨトウムシ類													
オオタバコガ													

黒さび病

留意事項

- 1 薬剤による防除では、予防散布が重要である。
- 2 薬剤散布は葉の裏を中心に行うと効果的である。

防除方法

- 1 被害株からの採穂を避ける。
- 2 被害葉は早めに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 3 ハウスでは換気を良好にし、湿度を下げる。
- 4 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ステンレス](#) M3 【2,000倍 ー／8回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
- ・ [マネージ乳剤](#) 3 【500～1,000倍 発病初期／6回】

キクえそ病・キク茎えそ病

留意事項

- 1 本病はアザミウマ類によって媒介されるウイルス病である。
- 2 病原ウイルスは、キクえそ病がトマト黄化えそウイルス(TSWV)、キク茎えそ病がキク茎えそウイルス(CSNV)である。
- 3 生育の後半から着蕾期にかけて病徴が現れる(キクえそ病)。
- 4 症状はよく似ており、病徴による判別は困難。

防除方法

- 1 ウイルスに感染していない親株から採穂する。
- 2 発病株は直ちに抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。
- 3 アザミウマ類の防除を徹底する。
- 4 収穫後、親株は摘蕾し、アザミウマ類の寄生を減らす。
- 5 ほ場及び周辺の除草を徹底する。

黒斑病・褐斑病

留意事項

- 1 露地栽培に発病が多い。
- 2 最終摘心後、降雨の多い場合に発病が多いので、発病前から薬剤の予防散布を行う。
- 3 ダコニール1000は、漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布はさける。薬液による汚れが生じるおそれがあるので、収穫間際の散布はさける。また、かぶれに注意する。
- 4 QoI剤(1 1)は耐性菌が生じやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 5 ストロビーフロアブルは、高温多湿条件下では使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる場合があるので注意する。展着剤の使用にあたっては、事前に適否を確認する。

防除方法

- 1 窒素質肥料の過用を避ける。
- 2 発病の多いほ場では、密植を避け風通しを良くする。
- 3 被害葉は早めに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- 4 抵抗性品種を選ぶ。
- 5 連作はできるだけ避ける。
- 6 土の跳ね上がり防止のために、わらまたは、ポリフィルムでマルチングを行う。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 7 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ダコニール1000](#) M5 【1,000倍 ー／6回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [トップジンM水和剤](#) 1 【褐斑病 1,500～2,000倍 ー／5回】
 - ・ [ベンレート水和剤](#) 1 【2,000～3,000倍 ー／6回】
 - ・ [ストロビーフロアブル](#) 1 1 【2,000～3,000倍 発病初期／3回】

白さび病

留意事項

- 1 施設栽培では春先と初冬に、露地栽培では初夏～梅雨時と秋期の頃に発病が多い。
- 2 薬剤による防除では、予防散布が重要である。
- 3 薬剤散布は葉の裏を中心に行うと効果的である。
- 4 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 5 ダコニール1000は、漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布はさける。薬液による汚れが生じるおそれがあるので、収穫間際の散布はさける。また、かぶれに注意する。
- 6 ジマンダイセンフロアブルはかぶれに注意する。
- 7 ストロビーフロアブルは、高温多湿条件下では使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる場合があるので注意する。展着剤の使用にあたっては、事前に適否を確認する。

防除方法

- 1 発病の多いほ場では、密植を避け風通しを良くする。
- 2 被害葉は早めに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 3 抵抗性品種を選ぶ。
- 4 被害株からの採穂を避ける。
- 5 発生が見込まれる時期に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ダコニール1000](#) M5 【1,000倍 ー／6回】
 - ・ [ハチハチ乳剤](#) 劇 3 9 【1,000倍 発病初期／4回】
 - ・ [ポリオキシシンAL水溶剤](#) 1 9 【2,500倍 発病初期／8回】
 - ・ [ジマンダイセンフロアブル](#) M3 【500～800倍 ー／8回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アミスター20フロアブル](#) 1 1 【2,000倍 発病初期／5回】
 - ・ [アフェットフロアブル](#) 7 【2,000倍 発病初期／3回】
 - ・ [ベンレート水和剤](#) 1 【1,000倍 ー／6回】
 - ・ [トリフミン乳剤](#) 3 【1,000倍 ー／5回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ [カナメフロアブル](#) 劇 7 【4,000～8,000倍 発病初期／3回】

7 低温時の施設栽培では、くん煙剤も有効である。(Ⅶ省力安全防除 参照)

根頭がんしゅ病

留意事項

1 採穂時は土に触れないように注意する。

防除方法

1 病原菌に汚染されていない床で育苗する。

2 発生した苗床、本ぼは土壤消毒を行う。(Ⅷ 土壤消毒 参照)

立枯病

防除方法

1 発病の多いほ場では、密植を避け風通しを良くする。

2 連作はできるだけ避ける。

3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ [ユニフォーム粒剤](#) 1 1 4

【花き類・観葉植物 立枯病(リゾクトニア菌) 土壤表面散布 18kg／10a
定植時または生育期／3回】

・ [リゾレックス水和剤](#) 1 4

【花き類・観葉植物 土壤かん注(3L／㎡) 500～1,000倍 生育期／5回】

・ [オーソサイド水和剤80](#) M 4

【花き類・観葉植物(除ばら、りんどう、せんいちこう、コスモス、ひまわり、
シネラリア、スイトピー、みやこわすれ、アンスリウム、斑入りアマドコロ)
600倍 -／8回】

アブラムシ類

留意事項

1 新梢、新葉に寄生し、古葉にはほとんど寄生しない。

2 ウイルス病を媒介する。

3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 施設栽培では、開口部を0.8mm目合いのネットで被覆し、有翅虫の侵入を防止する。

2 下記の薬剤を施用する。

・ [ダントツ粒剤](#) 4 A 【1～2g／株または6kg／10a 生育期株元散布 発生初期／4回】

・ [オルトラン粒剤](#) 1 B 【3～6kg／10a 株元散布 発生初期／5回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [モスピラン粒剤](#) 4 A 【0.5～1g/株 株元散布 生育初期/1回】
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [トランスフォームフロアブル](#) 4 C 【2,000倍 発生初期/3回】
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) 4 A
 - 【2,000～3,000倍 発生初期/5回】
 - ・ [アディオン乳剤](#) 3 A
 - 【花き類・観葉植物(除はぼたん) 2,000～4,000倍 発生初期/6回】
 - ・ [コルト顆粒水和剤](#) 9 B 【花き類・観葉植物 4,000倍 発生初期/4回】
 - ・ [ハチハチ乳剤](#) 劇 2 1 A 【1,000倍 発生初期/4回】
- 4 ハウス内では、くん煙剤の使用も有効である。(Ⅷ省力安全防除 1くん煙 参照)

アザミウマ類

留意事項

- 1 花卉には主にミカンキイロアザミウマ等が、葉では主にハダニ類に似た被害を及ぼすクロゲハナアザミウマ等が発生する。
- 2 花卉への被害を防ぐため、膜割れ(蕾から着色した花卉が見える前)前後の防除を徹底する。
- 3 青色粘着トラップの設置により、発生密度を調査できる。
- 4 品種によって被害の現れ方に差がある。
- 5 近紫外線カットフィルムを使用するときは、赤～紫系統の品種は色づきが悪くなるため、栽培を避ける。
- 6 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 施設栽培では、開口部を0.4mm目合いのネット(赤色ネットは0.8mmも可)で被覆し、成虫の侵入を防止する。
- 2 ビニル等のマルチングにより土中で蛹化するのを防ぐ。
- 3 近紫外線カットフィルムの被覆により、成虫の侵入を抑制する。
- 4 ハウス周辺の除草を行う。
- 5 露地でも越冬するため、親株は必要最低限を残し、摘蕾して寄生を減らす他、冬期防除を行う(ミカンキイロアザミウマ)。
- 6 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダントツ粒剤](#) 4 A 【2g/株 生育期株元散布 発生初期/4回】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [グレーシア乳剤](#) 3 0 【2,000倍 発生初期/2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用时には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ディアナSC](#) 5
【花き類・観葉植物(除りんどう) 2,500倍～5,000倍 発生初期／2回】
- ・ [アフーム乳剤](#) 6 【1,000～2,000倍 発生初期／5回】
- ・ [コテツフロアブル](#) 劇 1 3
【ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ 2,000倍 発生初期／2回】
- ・ [ファインセーブフロアブル](#) 劇 3 4 【2,000倍 発生初期／2回】

オンシツコナジラミ

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

- ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) 4 A
【コナジラミ類 2,000～3,000倍 発生初期／5回】
- ・ [コルト顆粒水和剤](#) 9 B
【花き類・観葉植物 コナジラミ類 4,000倍 発生初期／4回】
- ・ [ディアナSC](#) 5
【花き類・観葉植物(除りんどう) コナジラミ類 2,500倍 発生初期／2回】
- ・ [カルホス乳剤](#) 劇 1 B 【オンシツコナジラミ若齢幼虫 1,000倍 発生初期／4回】

ハダニ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 2 ナミハダニは薬剤抵抗性が生じており、効果の劣る薬剤も出てきているため、薬剤選択は特に注意する。

防除方法

- 1 収穫後の株は放置せず持ち出し処分する。
- 2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [マイトコーネフロアブル](#) 2 0 D 【ナミハダニ 1,000倍 開花前まで／1回】
 - ・ [カネマイトフロアブル](#) 2 0 B 【1,000～1,500倍 ー／1回】
 - ・ [コロマイト乳剤](#) 6 【1,500倍 ー／2回】
 - ・ [ダニオーテフロアブル](#) 3 3 【花き類・観葉植物 2,000倍 発生初期／2回】
 - ・ [パロックフロアブル](#) 1 0 B 【花き類・観葉植物 2,000倍 発生初期／1回】
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 1 3 【2,000倍 発生初期／2回】
- 3 ハウスでは、くん煙剤の使用も有効である。(Ⅺ省力安全防除 1くん煙 参照)

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

マメハモグリバエ

留意事項

- 1 品種によって被害の現れ方に差がある。
- 2 近紫外線カットフィルムを使用するときは、赤～紫系統の品種は色づきが悪くなるため、栽培を避ける。
- 3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 施設栽培では、開口部を0.8mm目合いのネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- 2 ビニル等のマルチングにより土中で蛹化するのを防ぐ。
- 3 近紫外線カットフィルムの被覆により、成虫の侵入を抑制する。
- 4 ハウス周辺の除草を行う。
- 5 被害株や葉、残さは、ほ場外へ持ち出し、ビニルで覆ったり、穴に埋めたりして処分する。
- 6 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダントツ粒剤](#) 4 A 【2g/株 生育期株元散布 発生初期/4回】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布または、かん注する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) 6
 - 【花き類・観葉植物 ハモグリバエ類 1,000倍 発生初期/5回】
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) 4 A
 - 【ハモグリバエ類 1,000～2,000倍 1L/m² かん注 発生初期/5回】
 - ・ [ディアナSC](#) 5
 - 【花き類・観葉植物(除りんどう) ハモグリバエ類 2,500～5,000倍 発生初期/2回】
 - ・ [カスケード乳剤](#) 1 5 【2,000倍 発生初期/3回】
 - ・ [ハチハチ乳剤](#) 劇 2 1 A 【ハモグリバエ類 1,000倍 発生初期/4回】

ヨトウムシ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 施設や簡易パイプ組みにより4mm目合いのネットで被覆し、成虫の飛来を防ぐ。
- 2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) 6 【花き類・観葉植物 1,000倍 発生初期/5回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [プレオフロアブル](#) UN
【花き類・観葉植物 ハスモンヨトウ 1,000倍 発生初期／4回】
- ・ [コテツフロアブル](#) 劇 1 3 【2,000倍 発生初期／2回】
- ・ [プロフレアSC](#) 3 0 【ハスモンヨトウ 2,000～4,000倍 発生初期／3回】
- ・ [フェニックス顆粒水和剤](#) 2 8 【ハスモンヨトウ 2,000～4,000倍 発生初期／4回】
- ・ [ゼンターリ顆粒水和剤](#) 1 1 A 【ハスモンヨトウ 1,000倍 発生初期／—】

オオタバコガ

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 施設や簡易パイプ組みにより4mm目合いのネットで被覆し、成虫の飛来を防ぐ。
- 2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) 6 【花き類・観葉植物 1,000倍 発生初期／5回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) UN 【花き類・観葉植物 1,000倍 発生初期／4回】
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 1 3 【2,000倍 発生初期／2回】
 - ・ [プロフレアSC](#) 3 0 【2,000～4,000倍 発生初期／3回】
 - ・ [ディアナSC](#) 5
【花き類・観葉植物(除りんどう) 2,500～5,000倍 発生初期／2回】
 - ・ [フェニックス顆粒水和剤](#) 2 8 【2,000倍 発生初期／4回】
 - ・ [デルフィン顆粒水和剤](#) 1 1 A 【1,000倍 発生初期／—】

ネグサレセンチュウ

防除方法

- 1 連作を避ける。
- 2 健全株から採穂する。
- 3 土壌消毒を行う。(XⅢ土壌消毒 参照)
- 4 フレンチ種のマリーゴールドを2.5か月以上栽培する。
- 5 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ネマトリンエース粒剤](#) 1 B 【20～25kg／10a 全面土壌混和 定植前／1回】
 - ・ [ネマキック粒剤](#) 1 B 【20kg／10a 全面土壌混和 植付前又は定植前／1回】
 - ・ [ガゼット粒剤](#) 劇 1 A 【30kg／10a 全面土壌混和 定植時／3回】
 - ・ [ラグビーMC粒剤](#) 1 B 【20kg／10a 全面処理土壌混和 植付前／1回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合がありますので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合がありますので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。